様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２５１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０１２０４

研究課題名（和文）都市祭礼における「祝祭性」の民俗学的研究

研究課題名（英文）Folkloristic study on "festivity" in urban festivals

研究代表者
阿南　透（Anami, Toru）

江戸川大学・社会学部・教授

研究者番号：５０２５５２０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の祭礼がコロナ禍の影響で中断し復活する過程の研究を通じて、祭礼における「祝祭性」を検討することを試みた。その結果、いくつかの祭礼ではお祭り騒ぎのような側面を減らすとともに、芸術的価値を高め、祭礼の真正性（オーセンティシティ）を強調する方向が見られた。その反面、予測不可能な事態を避けるべく、「スリル」や「スペクタクル」の側面を減らす傾向も見られた。このようにコロナ禍の影響により、祝祭性の特徴が明示されたように思われた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
コロナ禍による中断とそこから祭礼が復活した過程を詳細に分析したことは、同様の事例研究が出始めている現在、祝祭性の特徴を明らかにし、祭礼研究における「祝祭性」の議論を進展させうる指標となり得たと考える。また、祝祭性と関連して真正性のあり方の議論を通じて、他分野との広汎な議論を可能にしたと考える。祭礼の運営者にとっても、中断と復活の経緯の記録は今後の指標としての社会的意義があるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to examine the “celebratory nature” of festivals through research on the process by which Japanese festivals were suspended and revived due to the effects of the coronavirus pandemic. As a result, some festivals have begun to reduce their festive aspects while increasing their artistic value and emphasizing the authenticity of the festivals. On the other hand, there was also a tendency to reduce the “thrill” and “spectacle” aspects in order to avoid unpredictable situations. In this way, the effects of the coronavirus pandemic seemed to make the characteristics of a festival more evident.

研究分野：民俗学

キーワード：都市祭礼　祭礼　民俗学　祝祭性　コロナ禍の祭礼への影響　真正性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究代表者は本研究に先立ち科学研究補助金を２回受領している。「祭礼における「暴力」の発生と解決の民俗学的研究」（平成 23～26 年度）において、祭礼において喧嘩が頻発したり、山車をぶつけるなど「喧嘩祭」の異名を取る祭礼の実態を調査し、暴力がどのように解決されるかを明らかにした。「都市祭礼における「競技化」の民俗学的研究」（平成 27～30 年度）では、祭礼を「競技化」の観点から研究し、競技化のタイプ分けと、競技化を志向しない祭礼の存在を明らかにした。本研究はそれらを継承し、祭礼における「祝祭性」を研究することを意図した。

２．研究の目的

現代日本では祭礼やイベントが氾濫し、非日常性が感じられなくなったにもかかわらず、一部の都市祭礼は人々に充足感を与え熱狂的に支持されている。本研究は、その要因である「祝祭性」を解明するため、見る者を驚かせる「スペクタクル」、身体行為の極限状態における「スリル」、真実性や本物らしさを意味する「オーセンティシティ」という３つの視点を設定し、複数の祭礼を比較することを目的として研究を開始した。ところがコロナ禍により 2020 年からは祭礼の中止が相次いだため、祭礼の中止と再開をめぐるせめぎ合いを詳細に分析することを通じて「祝祭性」を研究する方針を付け加えた。

３．研究の方法

調査には、研究代表者である阿南透のほか、研究分担者として有本尚央（甲南女子大学）、内田忠賢（奈良女子大学）、研究協力者として中里亮平（長野大学）、森戸日咲子（筑波大学大学院、2020 年のみ）が参加した。これまでメンバーが調査してきた祭礼について、参与観察法による調査を行った。

また、人類学、社会学といった民俗学とは異なる視点から祭礼を研究する研究者を招いて発表をしていただき、意見を交換することを目指して複数回の研究会を開催した。これらの研究会は「祝祭性」に関する祭礼研究を進展するための方向性を模索するために有用なものであった。

４．研究成果

（１）コロナ禍の影響

2019（令和元）年にスタートした本科研は、当初は次の祭礼の調査を予定していた。南砺市福野の「福野夜高祭」、東京都府中市の「くらやみ祭」、砺波市の「となみ夜高まつり」、秋田県仙北市角館の「角館の祭り」、北海道札幌市の「YOSAKOI ソーラン祭り」、秋田県秋田市の「土崎神明社の曳山まつり」、青森県八戸市の「八戸三社大祭」、青森県青森市の「青森ねぶた祭」、大阪府岸和田市の「岸和田だんじり祭」である。しかしコロナ禍による影響を受けて当初の研究調査計画を大幅に変更し、対象を絞って、祭礼が中止に至る過程に関する議論や祭礼に対する社会的評価についての調査研究に重点を置いて進めることにした。ここでは有本尚央が担当した岸和田だんじり祭と、阿南透が担当した青森ねぶた祭の例を述べる。

①岸和田だんじり祭の例

緊急事態宣言が発出された 2020 年の春には、祇園祭や天神祭などの著名で大規模な祭りが相次いで中止を発表し、祭礼の自粛を当然とするような世間の風潮があった。その一方で、岸和田だんじり祭はあくまで通常開催を目指すという方針を取り、祭礼関係者が各所と調整を進めていることが報じられ

話題となった。しかし結果として、祭礼関係者自身が家族や職場などに強く反対され、参加が難しい状況に陥ったことで、中止が決定されることになった。

開催から一転して中止に至るプロセスにおいて岸和田だんじり祭の祭礼関係者が何を考え、どのように動いたのかを知ることができたのは、本科研の大きな成果のひとつだといえる。未知の感染症への対策という難しい課題を突きつけられた祭礼組織は、祭礼開催の是非をめぐっても意見が対立したが、そこで最も問題となったのは誰（どの組織）が中止という決定を下すかという部分であった。コロナ禍以前の「毎年開催されること」が自明であった時期には誰もが考えもしなかった、祭りを「中止」するという前例のない決断を引き受けることができる主体が祭礼組織内で明確ではないことが浮き彫りとなり、いわば責任の所在をめぐって祭礼関係者が頭を抱える事態が生じることになった。こうした祭礼運営が危機に直面した際のガバナンスに関連する問題は、昨今の伝統的祭礼でしばしば注目される持続可能性の議論などからは抜け落ちている論点であり、コロナ禍以降の都市祭礼を考えるうえで重要な課題となることが予想される。

また、問題状況における対処という点では、その他にも非常に興味深い変化を確認することができた。当初、通常開催を目指していた祭礼関係者たちは、感染症対策の計画を立案するなかで、単一の地区（2～3 ほどの中学校区の集まり）での対処が難しいと考え、近隣地域で同種の祭礼を行っている祭礼組織と連携を図り、地域間を跨ぐ広域的な連携組織を形成することで祭礼の実施に対して批判的な社会的評価に対抗しようとした。この広域連携組織は、岸和田市八地区年番新型感染症対策協議会と呼ばれ、協議会が主導してマスクや消毒液の配布、ワクチンの集団接種などの取り組みが行われた。新型コロナウィルスが 5 類に引き下げられた後も岸和田八地区祭礼年番という名称で岸和田市域の祭礼運営に影響力をもつ「より上位」の組織が新たに発足したことはコロナ禍における岸和田だんじり祭の大きな変化であったといえる。

②青森ねぶた祭の例

青森ねぶた祭は、2020 年には実行委員会が４月８日に中止を決めた。この年には、ねぶた制作を請け負う「ねぶた師」を支援するクラウドファンディングが起ち上がったほか、2021 年２月には青森市が、ねぶたの技法の作品を展示する「ねぶたアート創生プロジェクト」を開催した。こうして祭りはないものの、ねぶた的な造形は作られた。

2021 年は、１月に開催の方針を打ち出し、３月には安全を確保して開催する基本方針が決定した。ところが青森県でも感染者が増加したため６月 18 日に２年連続の中止が決まった。しかし、ねぶたの制作が進んでいたこともあり、無観客で運行して映像を配信する代替イベントを８月 27 日に開催し、また８月２日から６日までねぶた囃子の演奏をライブ配信した。こうして 2021 年は、ねぶた運行は一応行われ、芸術イベントのような映像が配信されたものの、多くの青森市民にとっては映像の中だけの出来事になった。ねぶたで「跳ねる」ことを楽しみにしていた青森市民にとっては、２年連続で「ねぶたのない夏」になった。

2022 年は、国と県のイベント開催方針を参考にした感染対策を取り、参加者、観客、関係者の感染防止対策を取った上で実施した。ハネトは事前申込制として人数制限を実施した。また、運行方式を変更し、一斉スタート方式ではなく順次スタートの「吹き流し方式」に改めた。このほか、観客席もすべて椅子席として席数を減らした。こうした制限を課したことにより無事に開催することができたが、参加した運行団体は例年の 22 から 17 に減少した。主催者が発表した観客数は６日間で 105 万人であ

り、2019 年の 285 万人から激減した。

2023 年は通常開催に戻す方針のもとに実施したが、運行方式は前年の吹き流し方式を踏襲した。ハネトの参加は元に戻った印象を受けたが、ある団体で関係者内部での暴力事件が発生し、当該団体は翌年の出場辞退を余儀なくされた。

このようにコロナ禍を経て起きた変化は、青森ねぶた祭における「お祭り騒ぎ」的な側面が縮小し、ねぶた本体の芸術的価値を強調する方向が見られた。

なお、紙数の関係から触れることができなかったが、研究協力者の中里亮平は、東京都府中市の「くらやみ祭」、秋田県仙北市角館の「角館の祭り」などの参与観察調査を行い、一定の役職に就くことでコロナ禍の祭礼を内部から経験した。これらの内容は別途公開する予定である。それとともに、東日本大震災等における祭礼の「自粛」に関する研究と比較することで、祭礼と非日常の関係性の再検討という祭礼研究を取り巻くより大きな問題に接続することを目指している。

（２）祝祭性

コロナ禍による中止はあったものの、その前後に開催された祭礼の調査を通じて祝祭性についての研究を行った。研究分担者の内田忠賢は、よさこい YOSAKOI 系イベント祭りを対象に「祝祭性」の調査研究を担当し、特に、1954 年にスタートした高知「よさこい祭り」、それを模倣し 1992 年から続く札幌「YOSAKOI ソーラン祭り」について、参与観察をもとに分析した。その際、事前に設定した３つの指標、すなわち①見るものを驚かせるスペクタクル、②身体行為の極限状態におけるスリル、③真実性や本物らしさを意味するオーセンティシティ、この指標を用いて以下のような考察を得た。

■高知「よさこい祭り」

高いスペクタクル、スリリングな身体性が、踊り子や観客に高い祝祭性を感じさせる。一方、ダンスを自由に創作することを競うため、真正性（オーセンティシティ）にこだわらない、ありは解放されたパフォーマンス、その祝祭性を高めていると思われる。

■札幌「YOSAKOI ソーラン祭り」

毎年、参加者として舞台に立つ者としては、スペクタクル、スリルが「祝祭性」を高めたのは、高知と同じである。ただ真正性については、高知「よさこい祭り」がオリジナルから出発したので、こだわる必要がなかったのに対し、そのコピーから出発した札幌「YOSAKOI ソーラン祭り」はオリジナルを意識せざるをえなかった。踊りや音楽に、ことさら地域性（北海道らしさ等）を強調する。高知「よさこい祭り」が高知（土佐）らしさを全く強調しなかったのと対照的である。コピーならではの「祝祭性」が指摘でき興味深い。

■札幌「YOSAKOI ソーラン祭り」以降の、よさこい YOSAKOI 系イベント祭り

名古屋「にっぽんど真ん中まつり」を代表格とするイベント祭りでは、札幌同様、各チームの背景となっている地域性、郷土をことさら強調するイベント、チームの踊り（振付、音楽、衣装など）へとシフトした。そのテーマは「創られた伝統」と呼ぶことができるような荒唐無稽なものも少なくないが、それらが生む祝祭性について、今後も注視すべきであろう。

■グローカル化

1990 年代後半からの、よさこい YOSAKOI 系の国内外での展開と増殖は、現代庶民文化の典型である。グローバルに展開する一方、各地域でのローカル性を強調する。このグローカルな現象が、2020 年代後半以降、どのように拡大、あるいは縮小するのか、ニッチながら現代社会の今後を占う指標となろ

う。

（３）祭りの展示施設

今回の研究では、祭りの展示施設について予備的な調査を行った。祭りの展示施設には、博物館のように研究と保存に重点を置いたものもあるが、観光客誘致を主目的とした施設も見られる。たとえば青森市には、ねぶたを展示する「ねぶたの家　ワ・ラッセ」という「文化観光交流施設」が存在する。青森ねぶた祭で使用したねぶた４台を１年間展示するほか、ねぶたの歴史や制作方法、制作者、全国のねぶたの分布などの展示があり、定期的に青森ねぶた祭の映像を上映している。展示するねぶたの選定方法は、その年の青森ねぶた祭における審査上位３台と、その他の条件を加味して１台を選ぶという基準を決めている。このため、展示されることが制作者の目標になり、美的水準の向上に貢献している。

また、ハネト体験と囃子体験を行い、観客に体験を通して祭礼の様子を感じてもらう企画を用意している。このような「祭り体験」は、各地の祭り展示施設で取り入れられている。たとえば徳島市の「阿波おどり会館」では、毎日行われる阿波おどり公演の中に体験コーナーを設けている。展示施設という管理された場で一定の祝祭性を体験することは、祭礼の利用という点でも興味深いものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 阿南透	４．巻 33
２．論文標題 青森ねぶたにおける女性の造形	５．発行年 2023年
３．雑誌名 江戸川大学紀要	６．最初と最後の頁 91-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50831/00001187	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中里亮平	４．巻 9
２．論文標題 祭礼の害としての「祭害」：コロナ以後の祭礼にむけて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 現在学研究	６．最初と最後の頁 10-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 内田忠賢	４．巻 -
２．論文標題 戦後復興の中で創出された都市祝祭とその後の展開‐よさこい/YOSAKOI系イベント祭り‐	５．発行年 2021年
３．雑誌名 学術シンポジウム開催報告書　都市祝祭‐歴史地理学者にはどう見えるのか？	６．最初と最後の頁 8-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 阿南透	４．巻 21
２．論文標題 テレビの中の『ねぶた・ねぷた』―1970年代のNHKテレビにおける祭り放映の特徴	５．発行年 2021年
３．雑誌名 江戸川大学紀要	６．最初と最後の頁 61-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50831/00000966	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 内田忠賢	4．巻 17
2．論文標題 地元学・地域学の系譜―「都市民俗生活誌」の成果から	5．発行年 2020年
3．雑誌名 奈良女子大学文学部研究教育年報	6．最初と最後の頁 49-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中里亮平	4．巻 180
2．論文標題 神輿と神輿会にみる祭礼とコミュニティ‐くらやみ祭りを主として‐	5．発行年 2020年
3．雑誌名 多摩のあゆみ	6．最初と最後の頁 34-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内田忠賢	4．巻 16
2．論文標題 都市祝祭の現在-よさこい祭りの競技化-	5．発行年 2020年
3．雑誌名 奈良女子大学文学部研究教育年報	6．最初と最後の頁 7-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中里亮平	4．巻 66
2．論文標題 民俗芸能研究と祭礼研究‐角館のお祭りの事例から‐	5．発行年 2019年
3．雑誌名 民俗芸能研究	6．最初と最後の頁 51-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中里亮平	4．巻 2
2．論文標題 拡大する祭礼 - 外部との関係性からみたくらやみ祭 -	5．発行年 2020年
3．雑誌名 新府中市史研究　武蔵府中を考える	6．最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内田忠賢	4．巻 39
2．論文標題 地域イベントの祝祭性　第32回YOSAKOIソーラン祭りにおけるチームRの大賞受賞を通して	5．発行年 2024年
3．雑誌名 人間文化総合科学研究科年報	6．最初と最後の頁 51-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内田忠賢	4．巻 3
2．論文標題 高知よさこい祭りの祝祭性　自らの33年間の参与観察を通して	5．発行年 2024年
3．雑誌名 ジオグラフィカ千里	6．最初と最後の頁 207-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中里 亮平	4．巻 300
2．論文標題 祭礼 「祭礼研究」の成立にむけて	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本民俗学	6．最初と最後の頁 154-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34560/nihonminzokugaku.300.0_154	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 中里亮平
2．発表標題 「偽」といかにつきあうか－参加者と調査者の立場から－
3．学会等名 日本民俗学会第74回年会
4．発表年 2022年

1．発表者名 阿南透
2．発表標題 青森ねぶた祭「中止」決定の過程から見えるもの
3．学会等名 日本生活学会第48回研究発表大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 有本尚央
2．発表標題 岸和田だんじり祭は、どのようにして「中止」されたのか
3．学会等名 日本生活学会第48回研究発表大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 内田忠賢
2．発表標題 戦後復興の中で創出された都市祝祭とその後の展開－よさこい/YOSAKOI系イベント祭り－
3．学会等名 人文地理学会歴史地理研究部会
4．発表年 2021年

１．発表者名 中里亮平
２．発表標題 女性にとっての祭礼、祭礼にとっての女性
３．学会等名 日本民俗学会第73回年会
４．発表年 2021年

１．発表者名 阿南透
２．発表標題 青森ねぶた祭について
３．学会等名 京都民俗学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 内田忠賢
２．発表標題 地元学・地域学の系譜 - 「都市民俗生活誌」「なら学」の成果から -
３．学会等名 日本地理学会秋季学術大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 内田忠賢
２．発表標題 自粛される祭礼行事 - 「コロナ後」の変わりゆく社会を見据えて -
３．学会等名 京都民俗学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 森戸日咲子
２．発表標題 都市祭礼における山車人形の現在とその変容の動態ー秋田県角館の作り手の技法と社会性を中心にー
３．学会等名 日本民俗学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 阿南透
２．発表標題 となみ夜高まつりにおける脱暴力化
３．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中里亮平
２．発表標題 神輿中心の祭礼における、暴力、もめごと
３．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 内田忠賢
２．発表標題 戦後復興期の都市祝祭の創出-高知よさこい祭りを中心に-
３．学会等名 日本地理学会2020年春季学術大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 有本尚央
２．発表標題 現代社会と「お祭り騒ぎ」ー大阪道頓堀・渋谷スクランブル交差点の定点観察から
３．学会等名 現在学研究会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計1件

１．著者名 木村 至聖、森久 聡、有本 尚央、小川 伸彦、平井 健文、武田 俊輔 、松浦 雄介、深谷 直弘、他	４．発行年 2020年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 216
３．書名 社会学で読み解く文化遺産	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	内田　忠賢 (Uchida Tadayoshi) (00213439)	奈良女子大学・人文科学系・教授 (14602)	
研究分担者	有本　尚央 (Arimoto Hisao) (70734333)	甲南女子大学・人間科学部・准教授 (34507)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	中里　亮平 (Nakazato Ryohei)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	森戸　日咲子 (Morito Hisako)		2019、2020年度に参加

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関